

ノ為ニ藍葉ト虽之ニ反シテ兵益水ノ為ニ得ル所ノ利益少カ  
 ラス何者則田圃ニ残留スル所ノ泥滓ハ肥料トナリ地味ヲシ  
 テ一段膏腴ナラシムルカ為之ナリ  
 吉野川沿岸ニハ此後苟モ熟練家ノ審査ヲ経ルニ非レハ断シ  
 テ新堰ノ設置若クハ旧堰ノ増築ヲ許可セサルヲ以テ得策ト  
 ス  
 諸洲嶼ノ川岸ハ今已ニ石工ノ壁ヲ迎ラシ以テ之ヲ扞衛防禦  
 スルノ術ヲ尽セリ。別宮川モ亦其状ヲ一ニスト虽他日之ニ  
 改良ヲ加ヘンゴトヲ要ス其上流ノ部(別宮川中)ハ殊ニ然  
 ルナリ

通船ノ便

吉野川ハ海ヨリ其上流ニ溯リ川口村、辺ニ至ル迄ニ十七里  
 ノ間舟楫ノ通航ニ便ス、其航路悉ク艱難是レ硃磧沙灘ノ數  
 限ナク且時々所ヲ変シテ定リナク加之ノミナラズ上流ニ最  
 多シトスル急湍危巖アルヲ以テノ故ナリ  
 其上流ニ溯リ能ク池田村ニ達スヘキ舟楫ノ大ナルハ載貨四

泥滓・ドロノ沈着物  
 膏腴 地味を肥えてゐる土地

迎ラシ・ 堰は堰の體字で、とりまくの意

舟楫・ 舟とかいを使用して水を漕ぎりものを運  
 び、ヒキヤクが草  
 硃磧沙灘・ 二、しが多、水深く舟行の危険  
 急湍危巖・ 急流で高く大きい石  
 舟楫・ 渡船、大船

少なくない。これは田地に残留する泥土が肥料となり、土地を一段  
 と肥やすためである。

吉野川(旧吉野川)沿岸では、今後専門家の審査を得なければ決  
 して新堤防の設置、または旧堤防の増築を許可しないことが得策で  
 ある。

諸洲渚の川岸は今すでに、石造りの護岸をめぐらして防御策を施  
 している。別宮川もまたその状態は同じであるが後日これを改良す  
 る必要がある。別宮川の上流部は特に必要である。

通船の便

吉野川は、海より上流へさかのぼり、川口村(山城町川口)に至  
 るまで一七里の間、船の通行に利用している。しかし航行はすべて  
 困難である。その理由は、砂礫・砂州が数限りなくあり、また時ど  
 きその流路を変え、そのうえ上流には多くの急流・巨岩があるから  
 である。

上流にさかのぼり池田村(池田町池田)に達する大きい船舶は、

十石ト辨スル者ヲ常トスレ能ク三十石以上ノ貨ヲ載セテ  
 行クモノ甚罕ナリ且ツ舟艇ノ喫水僅ニ七寸ナリ  
 旱天稀雨ノ時時急湍ニ潺々スル水ノ深サ僅ニ六寸ニ過キザ  
 ルノミナラズ一段是ヨリモ淺キコトアリ。此時ニ方リ舟艇  
 僅ニ十六石ノ貨ヲ積メリ然ルモ猶時トシテハ舟子等ヲ止メ  
 先ツ一路ヲ振開シ而後舟ヲ進ムル所ナキニアラス  
 池田徳島間ノ通船路ハ先ツ池田ヨリ幹川ヲ下リ第十村ノ下  
 モニ在ル吉野末流ニ浴ヒミツマノ地ニ至リ夫ヨリ榎瀬川ヲ登  
 別宮川ヲ過キ而シテ徳島ニ達スヌタ榎養海峽ニ出ツルニハ  
ミツマ地ヨリ榎養川ニ至ルナリ  
 載貨ノ舟艇川流ヲ溯ルニ三隻乃至五隻相連伴ンテ行クアリ  
 是レ急瀬沙灘ニ遭ハバ相助ケンカ為ナリ。池田ヨリ下流ニ  
 於ケルノ最難所ハ毛田村ノ辺ニシテ載貨僅々十石ノ舟艇ア  
 ルモ此難所ヲ通過セン為ニ動モスレハ十人乃至十二人ノ勞  
 カヲ要スルコトアリ。又時トシテ二十石乃至二十五石ノ舟  
 艇ト云ヒ岩津ノ地ヨリ上流ニ疎ルヲ得サルコトアリ。岩津  
 ヨリ下流ニ於ケルノ最難所トスルモノハ伊沢村ノ邊即之ナ  
 リ

罕ニ稀  
 鴨水ノ事  
 時節ノ意  
 潺々ノ意  
 浴ヒ  
 ナホトキ  
 猶時として、猶ノ意の事。ふは時としての意  
 天ニ夫  
 急瀬沙灘ノ意  
 毛田村ニ現在の池田町  
 動モスレバ  
 疎ルニ達する  
 伊沢村ニ現在ノ阿波町

四〇石※と称するものであるが、三〇石以上を積載して航行するものは稀で、その船舶の喫水はわずか七寸である。

旱天小雨の季節になると、瀬を流れる水の勢いは弱まり、水深わずかに六寸に過ぎず、またこれより浅いこともある。この時期になると、船舶はわずか一六石を積み、なお時どき船頭が竿さおをあやつることを止め、先ず水路を掘り開き、その後で船を進めなければならぬ所もある。

池田と徳島間の通船路は、池田から幹川を下り、第十村（石井町第十）の下流にある吉野川末流（旧吉野川）に沿って三ツ合※に至り、そこから榎瀬川を経て、別宮川を過ぎて徳島に達する。また榎養海峽に出るには三ツ合から榎養川を通過する。

荷物を積載した船舶が、川をさかのぼるのは三隻から五隻と連れ立って航行する。これは、急な瀬や沙灘すなに行き当たった場合に助け合うためである。池田から下流の最難所は毛田村（三加茂町毛田）の辺りで、積載量わずか一〇石の船舶でも、ここを通過するためには一〇人から一二人の労力が必要である。また時には二〇石（二五石積の船舶が、岩津の上流に上ることができない）がある。岩津より下流における最難所は、伊沢村（阿波町伊沢）の辺りである。

※1一石  
 一〇石が一トン

※2三ツ合  
 旧吉野川と今切川の分派点  
 （北島町高房）

別宮川ヲ溯リ上文述フルカ知キ舟艇ハ第十村ニ至ルヲ限リトス堰埭上ニ一路ヲ鑿テリト雖是只小舟ノミ能ク之ヲ踰エ池田以下ノ幹川中主要ナル榑頭驛場ハ半田・貞光・辻町・取町・岩津川島町第十ノ七ヶ所トス

池田ノ地ヨリ更ニ上流ニ至リテハ又別種ノ舟ヲ用エ工尾レ美流ニ適スル艇舟ナリ。舟子ハ非常ノ艱難ヲ冒シテ空舟ヲ引キ上流三里ヲ溯リ大瀬ト号クル疾流ノ直下ニ至ル此所ヨリ重量多クモ一千貫ニ過キザル貨物ヲ載セテ船航ス。又一般小サキ舟ハ能ク大瀬ヲ過キ上流一里即池田ヨリ四里トスル所ノ川口村ニ達ス此所ヨリハ重量七百貫ノ貨物ヲ搭載シテ還ル

都テ本流ノ中ニ舟艇ノ往來スルコト甚殊ナリトス

流尾洲嶼ノ間ヲ通路トスルモノハ主トシテ徳島撫養間ニ往來スル所ノ諸船之ナリ。此通路モ低水ノ時ハ甚タ淺シ。故ニ其通船ノ載貨五十石ニシテ喫水僅ニ一尺五六寸ヲ常トス。沙灘ヲ越エシカ為ニ空シク船ヲ停メテ潮水ノ生スルヲ待ツコト屢々ナリ、徳島撫養間ノ濤線中最惡ナル所ハ第一ニ櫻瀬川ニシテ今切川ニ近キ所低水僅ニ五寸ナリ、時々浪ニ

上文ノ前文前の方にある文句、第十村

榑頭ノ津頭

都テハすべて

喫水ノ吃水

濤線ノ船路

別宮川をさかのぼるのは、前述のような船舶は第十村が限度である。(第十)堰上には、一路を開けているがただ小舟がこれを越えることができるだけである。池田の downstream の本流で陸揚地(港)は半田・貞光・辻町・脇町・岩津・川島町・第十の七か所である。

池田より上流では、また別種の船舶を使用する。これは溪流に適した軽船である。船頭は非常な困難をおかし空船を引いて上流三里をさかのぼり、大瀬と呼ばれる急流の直下まで至り、ここより多くても一、〇〇貫を越えない貨物を載せて帰帆する。さらに小さい船で大瀬を越え上流一里、すなわち池田より四里の川口村(山城町川口)に達する。ここからは七〇〇貫の貨物を搭載して帰る。

すべて本流に船舶の往來することははなはだ稀である。

吉野川(旧吉野川)河口の洲嶼の間を通航するのは、主として徳島・鳴門間を往來する諸船舶である。この通路も低水時には甚だ浅い。このため五〇石船で、喫水わずかに一尺五寸六寸が常である。沙灘を越えるために船舶を止めて、潮水の満ちてくるのを待つことがしばしばある。徳島・撫養間の水路中で最も浅い所は、第一に榑瀬川の今切川に近い所で低水位はわずかに五寸である。時どきこの

※1一貫  
三、七五キログラム

※2稀  
吉野川は物資運般の通路であった、したがってこの記述は川口村より上流のことか。

浚疏ノ拳アルモ尚巨如斯其浚キヲ極ム、第二ニ廣島村ノ下  
 モニシテ吉野川末流ニ交ヌル所ハ變轉常ナキ沙灘ノ為ニ  
 甚タ渡航ノ利ヲ害ス、第三ニ撫養川ナリ此川ノ逐日浚キヲ  
 極ムルモ畢竟衰頽甚シキ吉野川末流ニ接スルノ近キヲ以テ  
 ナリ加之ノミナラス梅橋ト号クル一橋アリ其架柱三十三個  
 ハ花崗石ヲ用井其他ハ木柱ナレ氏大ニ水行ヲ妨クルカ為ニ  
 今僅ニ存スル潮水ノ勢モ益々衰微トナリ土砂ヲ掃盪スルノ  
 方モ愈々減スベシ

### 海陸通船ノ便

撫養港ノコト

「ムヤノセトレト稱フル佳美ナル一海峡ハ長サ一里余アリ、  
 阿波海ト内海トノ間ニ来往スル迅疾ノ潮流アリ故ニ此海峡  
 ハ頗ル注彫、現ニ吉野川ノ土砂陸續流シテ其中ニハルトハ  
 巽斯ニ潮流ノ掃ヒ去ルアリ嘗テ海峡ノ治塞ヲ憂ヘズ、六月  
 二十九日我ハ突視シ得タリ撫養川口ノ外ニ川ヨリ流出セル  
 渾濁土砂甚タシキ瀑水ハ海峡ニ深淵ナル清水ノ中ニ投スル

ヒツキョウ  
 畢竟ノ結局

氏リども

治塞ニたまり不さぐ  
 突視シリ突視シの事  
 渾濁ニにごる

場所の川浚いを行っているが、それでもなお最も浅い所である。第  
 二は広島村（松茂町広島）の下流で、吉野川の末流（旧吉野川）に  
 交差する場所は、変転極まりない沙灘の変化のために航行の便利は  
 損なわれている。

第三には撫養川で、この川は日々に浅くなっている。それは結局  
 衰退すること甚だしい吉野川末流（旧吉野川）に接しているため  
 ある。これに加え「梅橋」と称する橋があり、その橋脚に三三個の  
 花崗岩を使用し、その他は木の橋脚であるが、これらが非常に水流  
 を妨げている。このため今わずかに存在する潮水の勢いもますます  
 衰微し、土砂を流す力がいよいよ減っている。

### 海陸通船の便

#### 撫養港のこと

「撫養の瀬戸（小鳴門海峡）」と呼ばれる景勝の海峡は、長さ一里あ  
 まりである。阿波海（紀伊水道）と瀬戸内海との間に往来する急潮が  
 ある。このため、この海峡はすこぶる広くて深い。現に吉野川（旧吉  
 野川）の土砂が次つぎと流入しても、潮流がこれを流し去り、海峡に  
 溜まり塞ぐことはない。六月二十九日撫養川の川口から濁り切った泥  
 土が澄んだ海峡の深い淵に流入するところを、私は現実に見た。